第2セッション

司会　時間となりましたので、午後のセッションを始めさせていただきたいと思います。午後は二つのセッションから成り立っています。最初のセッションは13時30分より15時10分に終了する予定です。そこから若干の休憩を取りまして、15時30分よりその次のセッションを実施いたします。それでは、葉先生を座長として午後の第1回目のセッションを始めたいと思います。葉先生、よろしくお願いいたします。

5.「彼らは中日友好のために奔走した」

毛　杏雲

葉　ご在籍の皆様方、報告者の皆様、この交流会議を午後も引き続き行います。午後の一人目の報告者は毛杏雲教授です。もともと交通大学にいらっしゃって、上海交通大学、上海大学の両方で教えていらっしゃいます。ですから、交通大学を代表してご報告することもできますし、上海大学を代表することもできます。

ここでご報告するのは東亜同文書院についてです。ここ数年、私どものほうを訪問された方も非常に多い。その中には、具体的にいろいろなことを理解されている方もいらっしゃいます。この中には中国の方も日本の方も含まれますが、中国の方についてのご紹介は、本日は省略したいと思います。ここで皆様方に毛教授のほうからご紹介申し上げるのは、主に日本の学生についての状況です。では毛先生、よろしくお願いします。

毛　ご在籍の学者の皆様、教授の皆様、ご在籍の皆様、こんにちは。私の本日のテーマは「彼らは中日友好のために奔走した」というものです。東亜同文書院は1900年の設立から1945年の解散まで46年ありました。46期の学生さんがいらしたわけです。関連する文献資料によりますと、書院は5000名近くの学生を育てたことになります。日本でいまなお1000名あまりの卒業生が各分野で活躍されています。時間の関係で、今回は、現在把握されている資料が比較的多い、もしくは中国の改革開放後、上海大学と比較的交流の多い6名の日本の学生の方たちをご紹介申し上げたいと思います。

この方たちに共通の特徴ですが、一つ目は、特殊な環境の中で学習をされ、日本帝国主義の侵略の行為といったものを直に見聞きしたということです。二つ目は、中国と非常に強い結びつきを持っていることです。そして、中日友好のために力を尽くそうという志を持っている方たちです。三つ目は、中国改革開放という絶好のチャンスを利用して、中日人民の友好のために貢献されている方です。

まずお一人目は、第43期の学生である宮家愈さんです。宮家さんはすでに故人となられました。しかしながら、交通大学の人々は宮家さんを忘れることはありません。1984年、交通大学のキャンパスに1本の桜の木を贈ってくださいました。この桜の木はいま青々と茂っています。春になると桜は満開になりますが、桜が満開になるたびに宮家先生のことを思い出します。

1984年、宮家さんは上海交通大学を訪問されました。そして、日本に帰国されてから大金を投じて、1985年に日中教育協会をつくられました。自らが代理会長になり、後には会長になられました。この基金の利息が交通大学の有益な事業に使われました。日中教育協会が費用を提供して、毎

年3名から4名の青年教師を日本の大学に招いて教育を受けさせました。1985年から10年間の間、留学生の派遣が二十数回行われました。

この宮家さんの橋渡しによりまして、日本の昭和女子大学と上海交通大学が姉妹校の関係を結びました。人見学長が上海交通大学から顧問教授ということで認定されました。毎年留学生の交換を行っております。また、1992年、昭和女子大学は1億5000万円を投じて、交通大学のキャンパスに図書館正聖堂をつくり、そこに日本語の書籍を寄贈しました。

そして、上海交通大学と日本の大企業との関係を推進するため、宮家さんは三菱自動車の館さんを協会の副会長に招きました。三菱自動車は、1985年に200万人民元相当の自動車とその修理設備を寄贈し、87年には上海交通大学が自動車の専門クラスの学生の募集を始めました。そして、点検修理センターもつくりました。

1994年11月、日中教育協会と上海交通大学の交流10周年を記念して、宮家さんは日本友好訪問団56人を率いて上海を訪問されました。そのときに、交通大学の指導者たちとともに四つの大きなことをされました。一つ目は正聖堂の落成式を行ったこと。二つ目は、日中友好の碑の開幕式。三つ目は、昭和女子大学により57万人民元を投じて言語教育実験室ラボがつくられたこと。四つ目は、三菱自動車が100万ドルに相当する三菱自動車教育機材といったものを贈り、その贈呈式が行われました。宮家さんにより指導される日中教育協会は、交通大学の指導者たちを日本に何回も招きました。

お二人目は第44期の学生、秋岡家榮さんです。秋岡さんは京都大学を卒業されてから、朝日新聞の東京本社の外報部に勤められました。日本で初めて北京に派遣された特派員、常駐の記者です。1967年から5年間、秋岡さんは朝日新聞の北京支局長をされました。その特殊な身分を利用され、1972年、日本の首相である田中角栄の初めての訪中、中日国交正常化の面で非常に重要な役割を果たされました。そのため前後して12回、周総理からの接見を受けています。

秋岡さんは、中国と日本の政府間で情報を受け渡しする架け橋でした。また、1980年代に秋岡さんは人民日報海外版の日本の代理人となられました。朝日新聞退職の後も引き続き日本の代理人をされていました。そして、日本での人民日報の発行部数を拡大され、中国の経済発展、総合国力の成長を伝え、中国の国際社会における知名度、影響力を高めました。そのことによって人民日報社から高く評価されています。秋岡さんは私ども中国人民のまさに古い友人であるといえます。

三人目は倉田旭士さんです。倉田さんは25回訪中されました。ご自分が上海に行くときには、故郷に帰る、自分は老上海だとおっしゃっていました。倉田さんは1988年に神戸学院大学の訪中団を率いて上海を訪問されました。上海交通大学、上海第二医科大学、華東政法学院、上海財経大学、上海市対外文化交流協会と、それぞれ交流協定を結ばれました。日本の80年代、普通の私立大学が同時に中国の四つの有名な大学、交流機関とこのような交流をすることは並大抵ではありませんでした。

1990年夏、上海交通大学は倉田さんを顧問教授としました。1992年9月、倉田さんは神戸学院大学で初めての中国研修旅行を提唱され、始められました。六十数名の学生が燕京号というフェリーに乗って天津に着き、北京、西安、上海を訪問されました。この中国研修旅行は今日に至るまでずっと続いています。

1993年と95年、倉田さんは大学院生を連れて、50年前のご自身の足跡をたどる旅をされました。上海、南京、鎮江、揚州、広州などの土地をめぐられました。1996年、神戸学院女子短期大学の学長になられ、この10年来、中国の留学生400名を育てられました。倉田さんはこれらの留学生と膝を交えて話し合い、中国語で自分の上海留学

の経歴を話し、皆さんがしっかりと勉強し中日友好のために貢献するようにということをお話しされています。

また、中日両国の法律の交流の面で、倉田さんは民法の上下巻、その他の十数の論文を発表されています。また、「中華人民共和国の相続制度について」、「中華人民共和国の所有権について」などの論文も発表されています。日本の法律学会の方々が中国の法律についてよく理解するために貴重な資料を提供されました。倉田さんは、教育面での功績により、日本の天皇から勲章を受けています。倉田さんはまさに中日両国の橋渡しをされた方だといえましょう。

四人目は、44期学生の前田清蔵さんです。前田さんは上海で生まれ、上海小学校に通いました。そして、上海の東亜同文書院大学で2年間学ばれました。このことから中国通であることがわかると思います。

1980年代、日本の訪中団を率いて何度も上海を訪れました。そのときには通訳や案内役を自ら買って出ました、非常に熱意にあふれた方です。中国に対する思いも非常に特別なものがあり、中国の改革開放のすばらしいチャンスを使い、何回も中国語を学びにいらっしゃいました。すでに81歳のご高齢なのですが、昨年も上海にいらっしゃって、上海交通大学国際教育学院で中国語の上級クラスの学生となられました。若い学生とともに教室に座り、まじめに勉強されています。試験にも参加され、学業を全うされました。性格も非常に明るい方で、さまざまなことに興味を持っておられます。若い方と一緒に勉強するだけではなく、グランドでも一緒に運動されています。ご自分がどうやって体を鍛えるかということを教えられています。あぐらをかいて座っているかと思うと、突然、前後に開脚をされたりして、80歳のご高齢ということを皆さんに忘れさせるようなすばらしさです。また、学校の向かいにあるお医者さんの家に行き、中国医学、鍼灸といったものを学んでおられます。前田さんは、生きている限り勉強だということをよくおっしゃっています。これがまさに彼の健康、長寿の秘訣だといえましょう。

五人目は、第45期学生の吉川信夫さんです。吉川さんは1981年に交通大学を訪問されました。吉川さんの考えの下、同文書院の同窓会組織である「滬友会」がつくられました。また、1982年10月、上海交通大学の学校の指導者4人から成る訪日団を組織されました。これは、上海交通大学が改革開放ののちに初めて団を組織しての日本訪問となりました。そして、日本と交通大学との間の交流を始め、非常に広い協力の基礎を打ち立てられました。

1989年、吉川さんの提唱と出資の下、交通大学の日本留学帰国学生会が「日本科学技術情報」という隔月の雑誌をつくりました。この雑誌は各省市、校内の人には無料で配られるだけではなく、各省市の図書館にも寄贈されました。この雑誌の継続的な発行のために、吉川さんは18万ドルを投資され、交通大学と合弁で虹橋快速印刷公司をつくられました。そして、ご自身がこの会の日本側の代表を務められました。

1994年、交通大学の翁学長が訪日された際、お知り合いの学者や友人の皆様方と、中日環境保護問題について率直な意見交換をされました。95年11月中旬には第1回中日環境会議を行い、十数の機関、53名の教授が日本から参加されました。中国側からも百二十数名の方がこの会議に参加されました。これは、中日双方が環境保護の面について協力を行うためにしっかりとした基礎を打ち立てるものになりました。

しかし、吉川さんは、第2回の中日環境会議を準備されている際、直腸ガンを患われました。そして、第1回の手術が行われ、まだ健康回復の段階にあるときに、無理を押してこの準備に携わられました。吉川先生の遺志を継ぎ、1998年、上海交通大学虹橋会吉川信夫中日交流教育基金とい

うものをつくりました。基金の額は115万人民元です。吉川さん、私どもは永遠にあなたを懐かしく思います。

六人目は第46期学生の北川文章さんです。私どもが北川さんを訪問したとき、彼は「私は、若く多感な時期をこの交通大学のキャンパスで過ごしたんだよ」とおっしゃっていました。北川さんはこの忘れがたい生活を自分の人生の出発点だとおっしゃっています。また、今後何かを成し遂げるとしたら、中国の役に立つことをしなければならないとおっしゃっていました。

1972年の中日国交正常化、特に1978年に中国が改革開放の新時期に入ったとき、北川さんは中国との協力の糸口をそこから見つけられました。そして85年、北川さんは40年間来ていなかった中国に再びやってきました。そのとき、彼は日本の四大証券の一つである山一証券の副社長でした。非常に影響力のある証券業界での専門家になられていました。ということで、北川さんは中国の信託会社、中国銀行について債券発行のために情報を提供されました。中国の角度から出発され、中国の金融界の方々にさまざまな積極的な提案をし、専門を同じくする専門家の方々の信頼を得ました。そして、上海、大連などの大都市においていろいろな講義をなさいました。

1989年、北川さんは翁学長の招きを受け、上海交通大学でも講義をされました。そして、90年には上海交通大学の顧問教授となりました。しっかりとした金融理論の基礎、世界での実践の経験、証券・株式への理解により、日本の証券業界発展の歴史、そこからくみ取るべき教訓についてもお話しされました。また、株式・債券・証券取引についての基本的な知識を教えてくださいました。

北川さんは非常にまじめに講義をなさいます。情報量も豊富で授業の雰囲気も活発でした。学生たちには非常に歓迎されています。資料もご自分でつくられて日本から持って来られて、学生に配ります。1989年から毎年1～2回の講義をされていて、すでに10年余り続いています。その講座を聴いた学生たちは、非常に早い時期に外国の専門家から直接金融証券についての知識を聞く機会を得たわけです。

北川さんは日中教育協会の副会長も務められています。また、宮家会長と日中教育協会、上海交通大学の交流も支持されています。1996年、北川さんは日本霞山会の理事となり、2002年には理事長となりました。北川さんと交通大学との間の十数年の環境をまさに霞山会に持ってこられたわけです。その推進の下、上海交通大学と上海日本研究協会との交流活動が行われています。ハイレベルな中日環境分野でのシンポジウムを行い、若い世代の学者・研究者の訪問活動などを行っています。霞山会は毎年上海交通大学の5名の中国の学者に資金援助し、日本での研修を行っております。また、上海交通大学の歴代の指導者も訪日しています。本課題の研究も北川先生の積極的な提唱の下で行われたもので、大きな貢献をされています。北川さんは「中日友好のために力を尽くし、私は悔いはない」とおっしゃっています。

私の報告はここまでです。中日両国の人民の友情が永久に続くことをお祈りいたします。どうもありがとうございました。(拍手)

葉　毛教授、ご報告ありがとうございました。同文書院の学生の皆様方はたくさんいらっしゃいますが、本日ご紹介できたのはたった6名の方だけです。卒業された学生の皆様方の精神というものは引き継いでいかなければなりません。中日友好関係もこのまま続けていかなければいけません。すでに時間を使い果たしてしまいましたので、質問は夕方の時間に残したいと思います。